

日本画制作における「自然・自然現象」の表現の考察

—自作の原点を探る試みⅡ—

藤崎 いづみ

キーワード：Nature、サイエンス、真理、技法、スケッチ

1. はじめに

本稿は、筆者の専門領域の日本画制作における、主なる画題「自然・自然現象」をテーマ・モチーフとした制作の経緯と、これまでの作品・作風の振り返りと、テーマと技法の探求と考察を明らかにする。

筆者作風においてのテーマ・モチーフの形態や、造形美としての自然観の考察はどうだったか。サイエンスの視点でも考えてみる。それを一言でいえば、日本美術は自然の美を視覚化することを目指し、自然科学は自然の法則・システムを数値化する。どちらも真理を探究することには変わらない。画家は人の持つ本質的な感性で真理を描き留めていく。古典絵画の名作は自然の真理を追求し描いてきた。その神髄を探る。加えて日本美術の自然



藤崎いづみ作品①『蓮花2』紙本彩色 97.0cm×145.5cm
丸の内日本工業倶楽部会館1階旧東京経営者協会アートディスプレイに展示

観とサイエンスの世界観を比較し、筆者の自然・自然現象を表現した、独自の様式美の技法・素材、作風の成り立ちを考えてみたい。

2. 表現と技法

—吉田多最『松林図』と筆者の自然観—

日本画は、風の色・波形・霧・空の層、等の自然現象を様式美の視点からとらえて、線と面、色で実証してきた。地球全体の自然は精密なメカニズムで構成されているので、普通の日常に驚きの感動と発見がある。巨匠達はそれを描いてきた。

ここで、現代日本画家・吉田多最画伯¹の『松林図』制作への理念を引用する。

—襖絵の想い—

全ての理は自然の中にある。風雨にさらされ過酷な環境であろうその姿が語っている松林。己を松の一本一本に重ね思いを寄せる。人の時空間をはるかに越えた自然の中、小舟で揺らぐ水に身をまかせ己の宿命と向き合っている人がいる。見あげれば白くかがやく昼の月。丘にはススキが美しく枯れている。老木の根元には若木が育っている。生き継がれ尽きぬ命を感じる。全ての命の崇高な象徴龍王が日輪に向かってゆく。その姿に明日を託す²。

『松林図』は、2014 年秋に北アメリカに建立される曹洞禅「天平山成仏寺禅堂」³の客殿に奉納される 16 枚の襖絵である。以下は、曹洞宗大本山永平寺貫首の福山諦法の作品解説である。

（中略）この大作「松林図」は、画伯の「眼聴耳視」、研ぎ澄まされた五感が刻んだ心象のメッセージだ。修行・坐禅そのものを捉え、宇宙に流れる悠久の時間、永遠に変わらぬ森羅万象空間を、見事に表象しています。山川草木悉有仏性をおのずと語っています⁴。（中略）

思うに、画家は自然現象の神髄を、複雑で難解で深遠なものとして受け止め、そして主題として心に映して描いてきた。自然物・植物の造形は論理的で決まり事があり、構造的に矛盾がない。これを巨匠達は筆により、自然科学観のロジックとして表象してきたのであった。

筆者は時代を映す自然科学は理系の分野のみの学術研究ではなく、科学が明白に解明確立しない時代も、テクノロジーやソーシャルメディアが存在しない時代も、日本美術の巨匠達は自然現象を見据え研究し描き、考察してきたと考える。それは、上記の曹洞宗大本山永平寺貫首の福山諦法師の作品解説の「眼聴耳視」の一説の様に、画家は自然現象を目で聴き、耳で見て筆で伝えてきたのである。

筆者は自身の作風として、様式美・表現は線と面、色による仕上げと効果にこだわった。自身での観賞や考察から自然現象を読みとった結果、表現としては明解に形態としての意味、表情へこだわった。ここで水、霧、空気の表現の事例をとりあげて、その意図したところを述べてみたい。



藤崎いづみ作品②『蓮花1』紙本彩色 80.3cm×116.7cm 藤崎いづみ作品③『蓮花3』紙本彩色 80.3cm×116.7cm
丸の内日本工業倶楽部会館1階旧東京経営者協会アートディスプレイに展示

上記作品は、冒頭で紹介した藤崎いづみ作品①「蓮花2」との三連作である。制作上の骨子となる、水、霧、空気の表現として出来る限りストレートな表現にこだわり、面と線による明瞭で様式意匠的な画面構成を創った。冒頭の藤崎いづみ作品①「蓮花2」は水面の表情と空気を3段階に分割し、水辺の清涼感と地球を構成する水の形態美の明解さ、霧の軽やかさ、明るさを彩度の高い色彩で描き分けた。作品②、③は作品①を支える様な展示構成に配慮して制作した。上記の実践報告は2007年12月25日～2008年3月25日の期間に丸の内日本工業倶楽部会館1階旧東京経営者協会アートディスプレイとして彩った。

これは、東京駅丸の内という日本の中心部に展示する作品として、モチーフの蓮は「人に力を与える」という意味をこめて、国際都市丸の内を見守るようにとの、想いをこめたビジュアルメッセージとして選択したのである。

思うに、日本画作品は、その画面に観る人が自分の心を重ねることによって理解を深めることができる。その主題である自然の摂理を、観賞者の心象と重ねる事が出来るように、画家は自然観や現象を画面に映しとるのである。初夏の新緑の色は、日本画材岩絵の具の緑青や白緑で自然の生の色に近づける。それは、岩絵の具で自然そのものを表現していく筆さばきである。筆者にとり、この作品の経緯としては、「宝相華文様・縹緗彩色模写研究課題」⁵からスタートしたのである。



丸の内日本工業倶楽部会館1階旧東京経営者協会アートディスプレイに展示

「宝相華文様・纓綢彩色」の形態や色彩の考察は自然現象、自然界の草花、植物（葡萄・柘榴・牡丹）を意味のある色と捉え、隣り合わせのグラデーションで構成していると考えられる。それは、例えば十二単のそれぞれの色の意味合いの様に、東洋特有の色の個性は、色が混ざり合う事ではなく、そのまま表現された色彩が原点になる、という特徴をもつと思う。印象派の色彩の様に絵の具を調合し、光や印象を表現していく手法と対極の美意識と捉える。日本画の世界観は日本の風土・美観を表現するために技法的に直接的、現象的であると捉える。この辺りを巨匠の作品から考察していく事とする。水や水面の現象表現の違いは小倉遊亀⁶、ピエール・ボナール⁷の作品の比較によって伺える。

現代日本画の巨匠小倉遊亀の「浴女」⁸は浴槽の水面・質感を日本の美意識特有の、極めて具体的な様式表現であらわす。それは、面と線で水面・水中を表象し簡潔で明解であり、とくに、浴槽の湯のゆがみの線描は映像的である。対して、ピエール・ボナールの「浴槽の裸婦」⁹は絵の具を細かに重ね、浴槽の水面の光を表現し、色が混ざりあい観賞者の視覚の中で合成されていく印象主義的表現である。

加えて、色調の分析をする。「浴女」は浴槽の水中の色彩は緑一色である。色が混ざり合う事ではなく、そのままの表現された色彩として、陰影のない水面と水中の具象的な表現である。「浴槽の裸婦」では浴槽の水中は、とくに補色対比の青と黄色の組み合わせによる不規則で不安定な水中の陰影を、抽象的に視覚表現している。上記考察の具体的事例としてとりあげた。

一制作上の方法論と技法一

自然現象・自然界の表現は日本画の岩絵の具の筆使いに適している。言いかえれば自然現象は、岩絵の具を溶く様に滲む様に、緻密・繊細・丁寧に変化するからである。

東京芸術大学大学院の恩師の手嶋有男先生¹⁰からは次のように教えられた。「雲は風の

向きで形が変わります」右は、手嶋有男先生の型染めの型紙である。

おとぎ話のような月と兎をモチーフにした景色のデザインであり、雲の形態を地紋の様に画面構成して左右に広がる優雅で文学的な世界を表現している。



事例①手嶋有男作品型染め型紙

右は筆者の小作品である。雲の表現を筆で渴筆描きし、雲を風の流れにのせて描く様に試みた。初春の桜の情景は、重要文化財である『色絵吉野山図茶壺』¹¹ 野々村仁清¹²の京焼き作品の絵付け図柄を参考にイメージして制作した。画面上部には空と雲を配置し、画面下部には水面をつくり、自然界の対極の世界観、質



藤崎いづみ作品④『初春 (小)』紙本彩色 13.9cm×17.9cm

感で構成したが、色彩はどちらも白と金の描写で表現した。雲・桜山・湖という三層の自然世界観を様式デザインとして示したものである。

自然界を描いた作風では、日本の岩絵の具の特性と風合いで外国の風景にも筆者はチャレンジした。

時に、日本画の巨匠作品にはエキゾチックな亜細亜の風景や、優雅な欧州の風景が描かれた名作が沢山ある。次の藤崎いづみ作品⑤では、インドネシアバリ島現地でスケッチと体験を基に、熱帯の景色の特徴を示す東屋の雰囲気 オレンジで象徴し、池の水面の波形は速水御舟¹³の「埃乃土人ノ灌溉図」¹⁴の様式表現を参考に構成した。陽光と温度、湿度、

樹々、太陽を受けた空間表現としては様々な色彩の組み合わせによって、その空気や南国の風の心地よさを描きたいと筆をとった。



藤崎いづみ作品⑤『バリ島の風景』紙本彩色 33.3cm×45.5cm

自然界・自然現象を描くことは様々な発見があり楽しいことである。例えば、雲がどんな形に変化していくのか。たった、一度きりの変化だからこそ美しく、それは、二度と同じ形態にはならない。自然科学はその不思議さを数式で実証することに醍醐味があるのだろう。日本画作品は風の向きも、雲の形も、水も、地球の色も、全ての自然の姿を様式美で表現していく。自然の姿はそんな単純の中に複雑な美しさがあると、伝えていく日本美術の醍醐味を実感する。そして、自然科学もテーマが豊かで、夢があり、創造的な学術だと思える。画家は風の色が見えるから自然現象を描きたい、と思う。そしてありのままの姿に重要なキーワードが在るから、自然物をスケッチして画面に仕立てていくのであろう。

3. 学校教育法「自然現象」の位置づけ

さらに、自然現象、日本美術の醍醐味、楽しさを根本的に考えてみるために、日常生活の中での気づきについて、学校教育法を辿ることとする。ここで、高橋陽一『新版道徳教育広義』を引用する。

つづいて、学校教育法をみてみたい。(中略)その上位にある学校教育法には学校種別ごとの目的や目標が定められている(中略)。

第二十一条 義務教育として行われる普通教育は、教育基本法(平成十八年法律第百二十号)第五条第二項に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するように行われるものとする。(中略)

七 生活にかかわる自然現象について、観察及び実験を通じて、科学的に理解し、処理する基礎的な能力を養うこと。(中略)

九 生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。

筆者が思うに義務教育課程では生徒(子供)が自然や科学、美術を好きになるように指導していくことと捉える。不思議なことや、当然なこと、当たり前の日常の中に重要なキーワードが在る。そして、筆者は何時から自然物、自然現象に魅かれスケッチしてみたいと考えるようになったか振り返ってみると共に、普通の現実をささえる、楽しませることの中から美しさを伝えていきたいと願うのである。

以下も引用する。三菱ケミカルホールディングス社長小林喜光氏「理系と文系」(2014. 日本経済新聞)より

自然を対象とする学問を中心に履修すると「理系」と呼ばれる学生になり、社会へ出て技術屋になる。それが人間の活動を対象とする学問を主に履修すると「文系」になり、やがて事務屋になる。そんな大雑把な括りが良くなかったかもしれない。

サイエンスは対象がなんであれ、本質的に同じものだ。自然科学、社会科学及び人文科学という分類があるにすぎない。人は皆サイエンスの本質を学び、あるべき態度を身につけなくてはならないはずなのだ。(中略)

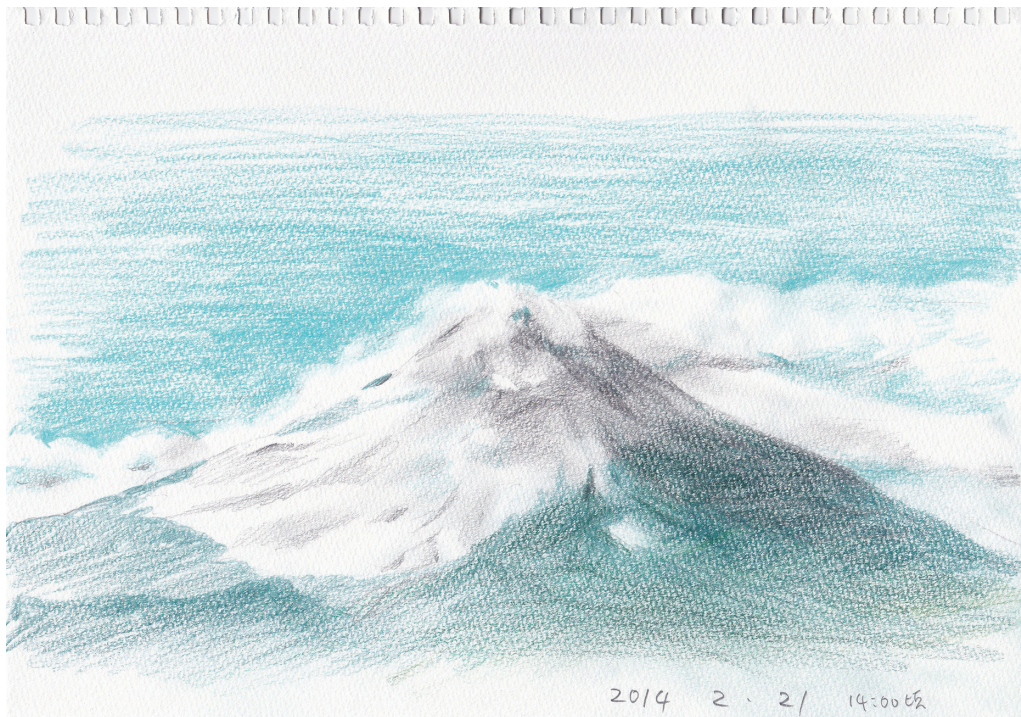
文系の人々に、もっと自然科学を好きになってもらいたい。自然の真理を追い求め、修め、力に変えていく、そのありがたみと面白さを肌で感じ、ある種のファンになって欲しいのである。それが理系の人間にできているとも思わない。実は単なる専門オタクに留まっている可能性もある。ただ、縁遠くは思っていないはずだ。また私は、自分が文理の選択で悩んだ経験もあり、文系のサイエンスの方がより複雑で難解なものを対象としていると思う。(以後、略)

自然は、複雑で神秘的な領域であるが、見事な秩序で成立している。その美しさ、楽しさ、その存在を美術は視覚的に表現できる。人はその自然の恩恵を忘れずに粛々と、見つめていくと、大切なものとか、重要な何かにきっと気付く筈である。

4. WORKS

―スケッチと富士山―

筆者は富士山と雲をスケッチして感じたことがある。雲の流れは、風の流れて形態が変化するため瞬間瞬間で、その時の最高の形態を維持しながら、変化をもたらす。二度と同じ形にはならない緊張感によりその美は存在する。風の流れ、温度・湿度、光、季節、時刻、この全てを条件としたその瞬時の美しさを形成するのである。水たまりの雨の波紋も同様な美の不思議さがある。自然物をスケッチして思う。自然の形態をよりよく描画しようと努力を重ねるが、目の前の自然物の造形美、それを越える線を描くことは不可能の様である。この先、常におごることなく粛々と自然を描きとめていきたいと思う。自然を見つける事で大切なことや、最も重要な何かが、解るのであろう。それは、きっと人間は謙虚に自然と向き合うことで、正しい判断が出来るようになる。松尾芭蕉のことばに「松のことは松にならえ」とある。それは、筆者にとり、制作の迷いや様々な正しい判断が欲しかったら自然物を描きなさい、と、教えられた記憶と重なる。そういえば、大学院時代に手嶋有男先生は「とにかく自然物のスケッチをきなさい。作品に迷ったら、解らなくなったら自然物をスケッチきなさい。」と指導して下さったのであった。スケッチによって自然・自然現象は、気候・光・空気等が、例えどんな風にうつろいゆく中でも、それでも生きていく、生まれかわっていく地球の産物と実感することができるのである。



藤崎いづみ作品⑥「富士山スケッチ」色鉛筆彩色 24.3cm×33.4cm

5. 制作における文学作品からのイメージ

筆者は、写生すると同時に純文学作品から美感や情緒をイメージして、自然・自然現象を筆で描く楽しさを大切にしている。以下、日本の自然風景が綴られている谷崎潤一郎『母を恋うる記』の表現である。(谷崎潤一郎『母を恋うる記』)

大空に懸った一輪の明月と地平線の果てまで展開している海との外に、一点の眼を遮るものもない。先刻松林の奥から見えたのは、ちょうどその月の真下の方で、最も強く光っている部分なのである。その海の部分は、単に光るばかりでなく、光りつつ針金を振るように動いているのが分る。或は動いているために、一層光が強いのだと云ってもよい。

筆者は、日本の美意識は直接にモチーフを描くことではなく、印象を描くことが日本画の特徴であるとも考える。東京美術学校¹⁵創設者岡倉天心¹⁶は東京美術学校の授業で「名月」というテーマでの課題で、月は描かない、月を視て、何を描くべきか、心を描くように暗示して、表現することの大切さを唱えたというエピソードがある。自然そのものを描くことではなく、自然を暗示させる提案であろう。これは筆者は、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』における日本の内在する美の本質の考察と分析に繋がるように思う。

右の作品は、筆者が20年以上スケッチ取材を継続しその都度、その印象、心象を様式表現して絵画制作にこだわった、伊豆大島都立大島公園の椿園の群生の美観である。この園では何百種の椿の花が春に咲き乱れる。この島の過去の三原山噴火や台風などの、自然災害をのり越えて咲いている、それでも、毎年咲き乱れるのである。



藤崎いつみ作品⑦『椿』紙本彩色 100cm×80.3cm

6. 結語

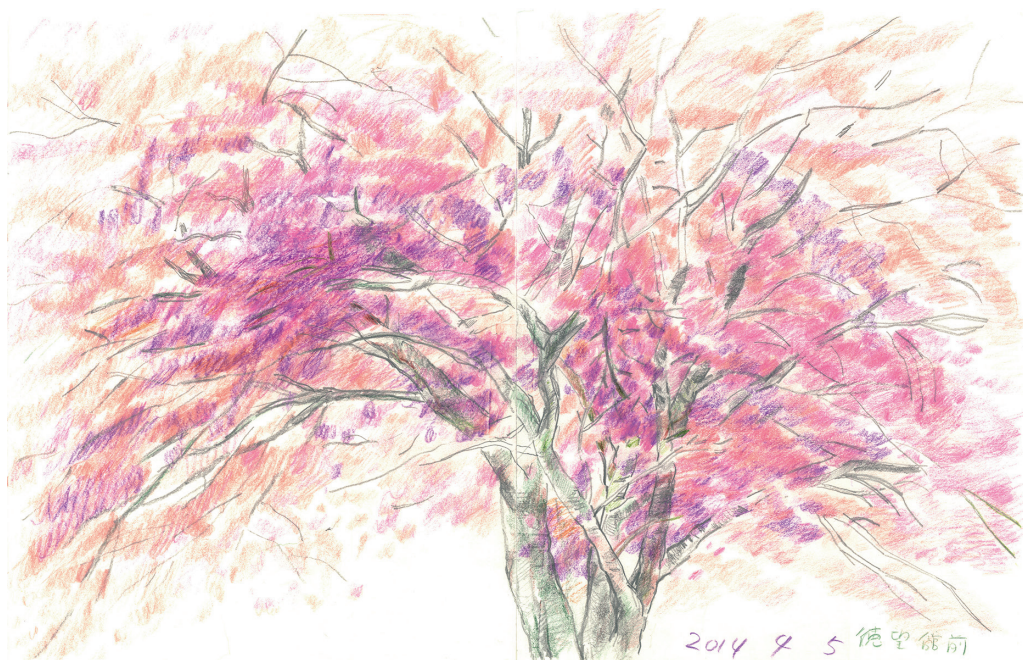
筆者は、毎年桜美林大学構内徳望館前の、桜の大木をスケッチしていこうと考えている。スケッチにより自然と向き合うこと、桜を描くことによって日本人の精神性を育んできた自然観と向き合うことから、自然の生命・神秘は人間の力及ばない、壮大な存在であると実感する。思う様に、自然の造形美を描きとれない、はがゆさを経験する。

以下、桜の強さに関するエピソードを記す。

福島県富岡町は全域避難地域であるが、ここの桜、桜並木は毎年変わらず咲き誇る。人が生活していても、していなくても、人のふみこめない領域であっても、きっと歴史を越えて咲き続けていくことだろう。自然力の強さを物語っている。

思うに、どちらの桜の老木も勝手に育っていく巨木である。それは、素直にありのままの姿で。自然の力は驚異で静かで、素直と捉えられる。自然と人間は素直に対峙するのがいいのかもしれない。自然の生命は自然に再生していく「よみがえり」の力を継続する。この考察は次の論への足掛かりとなる筈である。

そして、人が自然の神秘的領域に必要以上にふみこむ事は、いかなるものだろうか。自然は見事な秩序と規則で成立し、その美とその存在は偉大である。日本画はそれを表現し実証する。自然の恩恵を忘れずに、筆で肅々とたどっていくこと。自然はどんな時も、太陽に向かい精一杯生きていこうとする。自然の宝庫である地球上の、小さな自然の生命の不思議さ、強さ美しさに感謝すること。その恩恵を忘れないこと。画家は自らの本能で、その真理を描いてきたのであろう。



藤崎いづみ作品⑧「桜美林大学構内徳望館前の桜」色鉛筆彩色 35.5cm×57.0cm

7. 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導頂いた恩師の武蔵野美術大学小石新八先生に、深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

註

- 1 1947年～現在 日本画家。武蔵野美術大学卒業。1974年日展初入選。その後、特選他を受賞。高野山・龍泉院に作品蔵。
- 2・4 2014年「無意識の直覚吉田多最展」冊子、参照。
- 3 2014年、米国カリフォルニア州サンフランシスコに建立される曹洞宗「天平山成仏寺禪堂」は唐招提寺の伽藍を手本にし、曹洞宗伝承のため各国の修行僧が集う国際僧堂である。
- 5 筆者が東京藝術大学大学院で指導されたカリキュラムである。
- 6 1895年～2000年 現代女流日本画家の歴史的巨匠。
- 7 1867年～1947年 フランスの歴史的巨匠画家。
- 8 小倉遊亀筆 1938年 210cm×176cm 絹 / 彩色 額 東京国立近代美術館蔵
- 9 ピエール・ボナール筆 1937年 93cm×147cm カンヴァス / 油彩 プティ・パレ美術館
- 10 1930年～2013年 工芸家。元東京芸術大学美術学部教授。
- 11 野々村仁清作 江戸時代 高さ35.7cm 工芸品 重要文化財 福岡市美術館蔵
- 12 生没年不詳 江戸時代前期の京焼き陶工。
- 13 1894年～1935年 日本画壇の歴史的巨匠。
- 14 速水御舟筆 1931年 68.4×50.7cm 絹裏箔彩額 山種美術館蔵
- 15 1887年に我が国唯一の国立美術学校として設置された。現在の東京藝術大学。
- 16 1863年～1913年 東京美術学校創設者。日本の芸術教育の基礎を築いた人物。

参考文献

藤崎いづみ「絵画領域における現代学生への教育アプローチ—総合大学における造形美術教育指導の立場から—」『OBIRIN TODAY 教育の現場から』第12号、2012

『画集 小倉遊亀』日本経済新聞社 1993

『BONNARD』株式会社美術出版社 1980

『没後30周年記念特別展—松永耳庵コレクション展』図録 福岡市美術館／東京国立博物館 2001

『図解日本画用語辞典』東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕2007

『山種美術館所蔵 御舟作品集』山種美術館 1986

高橋陽一『新版 道徳教育講義』株式会社武蔵野美術大学出版局 2012

2014年3月17日付 日本経済新聞夕刊『あすへの話題』

佐治晴夫『女性を宇宙は最初につくった』株式会社春秋社 2009

谷崎潤一郎「母を恋うる記」『刺青・秘密』新潮文庫 1988

『岡倉天心—芸術教育の歩み—』東京藝術大学岡倉天心展実行委員会 2007

『東京藝術大学創立100周年記念展—日本画・彫刻—』東京藝術大学・朝日新聞社 1987

谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中公文庫 2011

作品リスト

藤崎いづみ作品①「蓮花2」紙本彩色 97.0cm×145.5cm 2007年制作

藤崎いづみ作品②「蓮花1」紙本彩色 80.3cm×116.7cm 2007年制作

藤崎いづみ作品③「蓮花3」紙本彩色 80.3cm×116.7cm 2007年制作

- 藤崎いづみ作品④「初春（小）」紙本彩色 13.9cm×17.9cm 2007 年制作
藤崎いづみ作品⑤「バリ島の風景」紙本彩色 33.3cm×45.5cm 2002 年制作
藤崎いづみ作品⑥「富士山スケッチ」色鉛筆彩色 24.3cm×33.4cm 2014 年制作
藤崎いづみ作品⑦「椿」紙本彩色 100cm×80.3cm 2010 年制作
藤崎いづみ作品⑧「桜美林大学構内徳望館前の桜」色鉛筆彩色 35.5cm×57.0cm 2014 年制作